

..時・評..

高山 靖子



万博 コ・デザインチャレンジ

異業種共創へ手法共有を

大阪・関西万博で、EXPO共創事業特別プログラム「Co-Design Challenge(コ・デザインチャレンジ)」に注目している。「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマの下、「これからの日本のくらし(まち)をつくる」をコンセプトにした多様な地域企業による共創プロジェクトである。

近年、業種や職種の垣根を越えた協業は加速し、大手企業にも社外との共創に注力する動きが見られる。現代のデザインプロセスにおいて、多角的な視点からのインプットは不可欠であり、社内外の異なる専門性を持つ人々が会する物理的な場の重要性は増している。実際、筆者が取材した企業では活発な意見交換を促す会議スペースに加え、アイデアを迅速に具現化するための3Dプリンターや工作機械などが整備されていた。中にはバーカウンターを備え、偶発的な対話や発想の連鎖を促す工夫をしている企業もあった。

こうした共創の場合は、デザイン思考

の初期段階である「共感」や「問題定義」において、新たな視点や潜在的なニーズの発掘を可能にする。また、試作のための設備は抽象的なアイデアを具現化して共有し、フィードバックに基づいた改善を繰り返すアジャイル開発の実践を容易にする。

「デザインは一人でするものではない」。日本の工業デザインの先駆者、柳宗理(1915～2011年)の言葉は今も色あせない。彼の代表作バタフライスツールは当時、成形合板を研究していた産業工芸試験所東北支所(仙台市、元工芸指導所)の技師乾三郎と、加工技術を有する天童木工(山形県天童市)との緊密な連携によって生まれた。この革新的なツールが発表されたのは1956年。69年も前のことである。

現代の共創における筆者の関心は、

どのような専門性を持つ人々がどのようなプロセスを経て協働し、どのような相乗効果を生み出しているのかという点にある。万博の公式ウェブサイトで公開されている情報は残念ながら、中心企業の技術的な側面や、SDGsへの貢献を示す素材の工夫に偏っている印象だ。

日本には卓越した技術力を持つ中小企業が数多く存在する。新素材の開発や高度な技術力はもちろん重要だが、異業種との協働・共創の手法は、そうした潜在的な力を開花させるために欠かせない鍵となる。万博という舞台でその具体的な方法論や成功事例が共有され、全国の中小企業の活性化につながることを願う。

(静岡文化芸術大デザイン学部教授)

たかやま・やすこ 1966年、愛知県生まれ。同県立芸術大美術学部卒。東芝デザインセンター、同大非常勤講師などを経て2007年に静岡文化芸術大着任。15年から現職。専門はプロダクトデザイン、デザインマネジメント。芸術工学博士。トルコ・イズミル経済大などとの国際交流もライフワークとする。